



『大往生したけりや医療とかかわるな「自然死」のすすめ』。夕刊フジ読者の中にも、読んだ人は多くいるのではないだろうか。

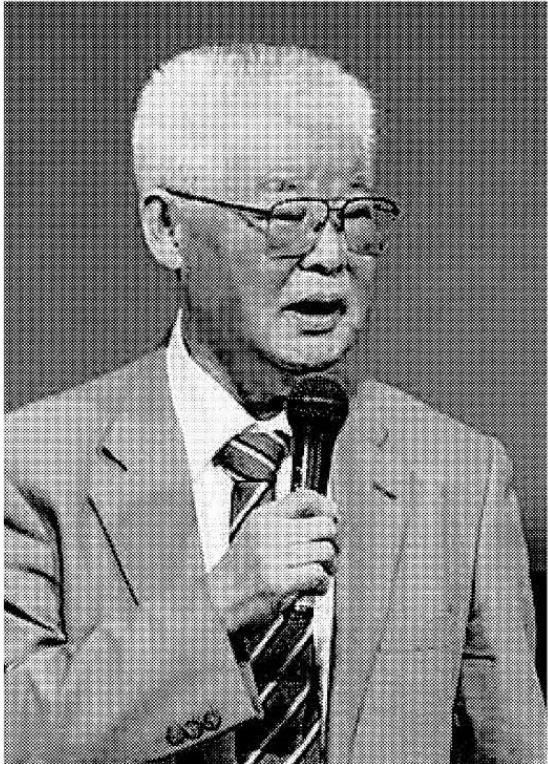
この本が発売された2012年、くしくも僕も、『平穩死10の条件』という本を上梓。これをきっかけに、行き過ぎた延命治療に疑問を投げかけた本が数多く出版され、議論が活発になりました。

本書の著者である医師、中村仁一先生が6月5日に御自宅で亡くなっていったことを最近知りました。享年81。死因は、肺がんとの発表です。

講演会などで何度も中村先生とご一緒し、会うたびにその考え方に深く共鳴をし、勝手に「兄貴」とお呼びしていました。それなのに、訃報を知らぬまま3カ月も過ぎていたことに、寂しさを禁じ得ません。

今の僕は、コロナ対策に関し町

177 医師 中村仁一



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

「末期がんの人を家に帰す?」
「管1本もなく穏やかに死ねるわけ」
「死は敗北だ。最期まで治療をするのが医師の使命だ」
「死ぬ当日まで食べて笑える?」
「高齡者のがんは、何も処置しなければ痛まない。だから僕は、最期まで何もしませんよ」と。
「高齡者のがんは、何も処置しなければ痛まない。だから僕は、最期まで何もしませんよ」と。

「死は敗北だ。最期まで治療をするのが医師の使命だ」
「死ぬ当日まで食べて笑える?」
「高齡者のがんは、何も処置しなければ痛まない。だから僕は、最期まで何もしませんよ」と。
「高齡者のがんは、何も処置しなければ痛まない。だから僕は、最期まで何もしませんよ」と。

「高齡者の最後の仕事とは、自分の死を若い世代に見せる事だ」とか
「死」：先生、僕は一生、貴方を越えられないでしょう。
「高齡者の最後の仕事とは、自分の死を若い世代に見せる事だ」とか
「死」：先生、僕は一生、貴方を越えられないでしょう。

まさに「有言実行の死」

(写真は筆者提供)